

一般市民の社会的スキル教育に対する認識と評価

金山元春・中台佐喜子・前田健一

Opinions and evaluations of social skills education by ordinary citizen

Motoharu Kanayama, Sakiko Nakadai, and Kenichi Maeda

本研究では、一般市民を対象として、①学校（保育所、幼稚園、小学校、中学校、高校）で社会的スキル教育を実施することにどのくらい必要性を感じるか、②学校で社会的スキル教育が実施されるとすれば、どのようなスキルを取り上げてほしいと思うかの2点について調査した。主な結果は次のとおりであった。①社会的スキル教育の必要度の評定値は保育所から小学校5・6年まで階段状に増加しており、その後はゆるやかに減少していた。②社会的スキル教育で取り上げてほしいスキルは、幼稚園では基礎的なスキルが上位にあげられ、小学校の時期には仲間関係の中でイニシアチブをとれるようなスキルの習得が求められていた。中学校、高校では発達段階に伴って自己尊重の「アサーション」へのニーズが高まっていた。中学校以降では、かなり高度なスキルの習得が求められていた。

キーワード：社会的スキル教育、一般市民、認識、評価、ニーズ

問題と目的

学校現場で、不登校やいじめ、学級崩壊などの問題が深刻化している。これらの問題が深刻化している背景の1つに、社会的スキルの不足した子どもが増えてきたことがあげられる（河村, 1999）。社会的スキルとは、円滑な対人関係を形成、保持していくために必要な認知的判断や行動に関する技能で、学習可能なものであるとされる（吉村, 2003）。社会的スキルは、日常生活における対人経験を通してだんだんと学習されていくものである。ところが今日では、少子化や核家族化、あるいは都市化の進展に伴って、家庭でも地域社会でも子どもたちの人間関係は希薄になり、日常生活における対人経験を通して社会的スキルを学ぶ機会は激減した（小林, 2002）。集団生活の場である学校は、社会的スキルが不足した子どもにとって、強いストレスに曝される場となる。これが上述の諸問題を生み出す背景と考えられる。自然なままでは社会的スキルが身につけにくくなっている現状では、教育の場において意図的・計画的に社会的スキルを訓練する必要があると考えられる。

こうした問題意識から開発された教育技法が、学級の子ども全員を訓練対象とする学級単位の集団社会的スキル訓練である。学級単位の集団社会的スキル訓練は、一般の子どもに社会的スキルの学習

機会を積極的に提供することによって、社会的スキルの学習不足から派生する問題を予防し、子どもの健全な社会性を育成しようとする発達援助的取り組みである(佐藤・金山, 2001)。こうした予防的・発達の観点重視し、学級全体を対象として実施される社会的スキル訓練は、社会的スキル教育とも呼ばれる。

社会的スキル教育の効果については、幼児(例えば、金山・日高・西本・渡辺・佐藤・佐藤, 2000)、小学生(例えば、金山・後藤・佐藤, 2000)、中学生(例えば、渡辺・山本, 2003)を対象とした研究によって検討されている。これらの研究結果はおおむね社会的スキル教育の効果を示すものであり、社会的スキル教育は子どもの社会的スキルの育成に有効な技法であるとされている(金山・佐藤・前田, 2004)。

こうした実証的研究が蓄積される一方で、教諭向けの実践指導書の出版(例えば、小林・相川, 1999)、教育雑誌への関連記事の掲載(例えば、小林, 2003)、テレビの特集番組の放送(例えば、NHK, 2001)など、社会的スキル教育の普及活動が活発化している。教職研修のテキスト(例えば、藤枝, 2002; 森田, 2003)や全国各地の教育委員会・教育センター主催の研修会(例えば、相川, 2004; 前田・金山, 2003)などでも、社会的スキル教育は重要な教育技法の1つとして取り上げられている。しかしながら、実際の学校現場では「その名称を聞いたことがある」という程度の理解が一般的といわれる(小林, 2003)。

社会的スキル教育の学校現場への普及を進めていくためには、社会的スキル教育に対する教諭の認識や評価を知るための研究が必要となるだろう。なぜなら、社会的スキル教育は、上述のように予防的・発達の観点から学校で実施されるものであるため、実施の主体は研究者やカウンセラーではなく、学校の教諭となることが予想されるからである。

こうした考えから、中台・金山・斉藤・新見(2003)は、社会的スキル教育に対する教諭の認識や評価を知るために、小学校教諭と中学校教諭を対象に次の2点について調査した。1つは、学校で社会的スキル教育を実施することにどのくらい必要性を感じるかについてであった。調査では、保育所、幼稚園、小学校、中学校、高校と各発達段階における必要度が評定された。その結果、小学校教諭は保育所から中学校まで階段状に評定値が増加し、中学校の時期を最も社会的スキル教育が必要な時期であると考えていること、一方、中学校教諭は小学校3・4年を頂点に発達早期から社会的スキル教育を実施する必要があると考えていることがわかった。もう1つは、学校で社会的スキル教育を実施するとすれば、どのようなスキルを取り上げたいと思うかについてであった。調査の結果、小学校教諭、中学校教諭ともに「相手の気持ちを考えて接する」「イライラしたり、ドキドキしたりした気持ちをコントロールする」といったスキルのニーズが高いことがわかった。

中台他(2003)の調査結果は、次のように活用できる。例えば、小学校教諭は、中学校の時期と比べると小学校の時期は社会的スキル教育があまり必要でないと考えられる傾向にあるので、小学校教諭に社会的スキル教育を紹介するときには、予防的・発達の取り組みの重要性を強調し、早期から社会的スキル教育を実施することの意義を伝える必要があるだろう。一方、中学校教諭は、社会的スキル教育は中学校よりも小学校で実施される必要があると考えられる傾向にあるので、早期介入の意義からその点については同意しながらも、それが必ずしも中学校の時期に社会的スキル教育が必要でないことを

意味しないこと、対人関係の不調に起因する不登校やいじめが増える中学校の時期にこそ対人関係を良好にするための教育、すなわち、社会的スキル教育を実施する意義があることを伝える必要があると考えられる。

また、小学校、中学校の教諭を問わず、「相手の気持ちを考えて接する」や「イライラしたり、ドキドキしたりした気持ちをコントロールする」といったスキルへのニーズが高かったことから、これらのスキルを取り上げた社会的スキル教育の実践事例をその成果とともに紹介することで、教諭の社会的スキル教育に対する興味・関心を高めることができると考えられる。

このように、中台他（2003）の調査結果は、学校現場に社会的スキル教育を普及させるうえで貴重な資料となる。しかし、社会的スキル教育の普及には、学校だけでなく、地域社会の理解と協力が求められよう。最近では、学校における教育活動の成功には地域社会すなわち一般市民の理解と協力が重要であることが以前にも増して強調されている（小泉, 2002）。地域社会における一般市民からの理解と協力が得られにくい取り組みは、学校教育の中に定着することは難しいだろうし、逆に一般市民からの理解と協力が得られやすい取り組みは学校教育の中に定着し、大きな成果を生むものと考えられる。社会的スキル教育を学校教育の中に普及、定着させるには、学校現場の教諭だけでなく、一般市民が社会的スキル教育をどのように認識し、評価するのかわ知る必要があると考えられる。

そこで本研究では、一般市民を対象に中台他（2003）と同様の調査を実施する。すなわち、①学校（保育所、幼稚園、小学校、中学校、高校）で社会的スキル教育を実施することに、どのくらい必要性を感じるか、②学校で社会的スキル教育が実施されるとすれば、どのようなスキルを取り上げてほしいと思うかの2点についてである。こうした調査を通じて、一般市民の協力のもとに展開される社会的スキル教育のあり方について検討することが本研究の目的である。

方 法

2004年1月に、ある地方都市で開催された市民講座に参加した一般市民を対象に調査を実施した。講座のテーマは「自他尊重のコミュニケーション理論」であった。内容は、自他尊重のコミュニケーションを可能にするアサーションと社会的スキル教育についての講義、演習であった。講座の終了時に質問紙調査への協力を求め、回答後、その場で用紙を回収した。

1. 社会的スキル教育の必要度

「あなたは、下にあるそれぞれの時期において、社会的スキル教育を行うことにどのくらい必要性を感じますか。「まったく必要でない＝1」「あまり必要でない＝2」「少し必要である＝3」「かなり必要である＝4」「非常に必要である＝5」の中から、あてはまる数字にひとつだけ○をしてください。その他にも必要であると思う時期があれば、具体的にお書きください（例：大学）」という教示文を用いて、7つの時期（①保育所、②幼稚園、③小学校1・2年、④小学校3・4年、⑤小学校5・6年、⑥中学校、⑦高校）についてそれぞれ必要度の評定を求めた。また、「その他」用の自由記述欄も用意した。

2. 社会的スキル教育で取り上げてほしいと思うスキル

「あなたが住む町の幼稚園で、社会的スキル教育が実施されるとします。あなたは町の住民として、

幼稚園でどんな社会的スキルをとり上げてほしいと思いますか。下にある①～⑬のうち、取り上げてほしいと思うものの番号に、いくつでもいいですから○をしてください。①～⑬の他にもあれば、その他の欄に具体的にお書きください。」という教示文に続き、13のスキル(表1の①～⑬参照;中台他,2003と同じ)を列記した。また「その他」用の自由記述欄も設けた。教示文の下線部を変更して、幼稚園、小学校、中学校、高校それぞれについて回答を求めた。

結果と考察

1. 社会的スキル教育の必要度

受講者28名(年齢範囲:25～82歳,中央値:56.00)から回答を得た。社会的スキル教育の必要度の評定値を従属変数,評定対象の発達段階(保育所,幼稚園,小1・2,小3・4,小5・6,中学校,高校)を独立変数とした一要因の分散分析を行った。その結果,評定対象の発達段階の主効果が有意であった($F_{(6,156)}=4.73, p<.001$)。Ryanの多重比較($p<.05$)の結果は,保育所<小3・4,保育所<小5・6,幼稚園<小5・6,高校<小3・4,高校<小5・6であった。

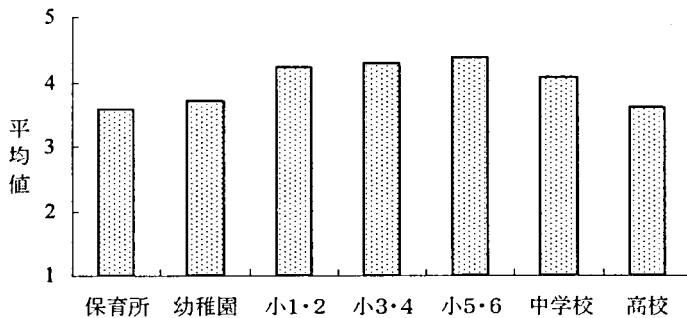


図1 社会的スキル教育の必要度の評定値

図1を見てわかるように,社会的スキル教育の必要度の評定値は,保育所から小学校5・6年まで階段状に増加し,その後は減少していた。この差は多重比較の結果にもあらわれていた。すなわち,一般市民は小学校高学年を頂点として児童期に社会的スキル教育を実施する必要性が高いと考えていた。児童期は社会的スキルの学習において最も重要な時期と考えられており(Cross, 1996),この点で一般市民の見解は妥当といえる。小学校における社会的スキル教育の実施には地域社会の理解と協力が得られやすいと予想される。一方で,保育所や幼稚園,中学校や高校における社会的スキル教育の実施については小学校に比べると必要度の評価が低かった。一般市民に対して社会的スキル教育を紹介する際には,保育所や幼稚園,中学校や高校で社会的スキル教育を行うことの意義を強調する必要があるだろう。保育所や幼稚園については,予防的・発達の取り組みの重要性を強調し,発達早期からの社会的スキル教育の意義を伝える必要があるだろう。また,中学校や高校については,対人関係の不調に起因するさまざまな問題(例えば,不登校,いじめ,暴力)が頻発する時期であるので,対人関係を良好にするための教育である社会的スキル教育が積極的に実施される意義があることを

伝える必要があるだろう。

いずれにせよ、評定平均値は発達段階を問わず、3.5点以上の値を示しており、全体的には、社会的スキル教育は「必要である」という見解が優勢であった。社会的スキル教育の必要度については比較的高い評価が得られているので、学校で社会的スキル教育が実施されるとき、一般市民にはどのような役割が期待されているのか、その具体例を示すことで彼らの社会的スキル教育に対する関心を高めることができると考えられる。具体的には、地域社会におけるモデルとしての役割や子どもが学校で学んだスキルを学校以外の生活場面へ一般化させていく際のエージェントとしての役割が求められるだろう。

自由記述には大人に対する社会的スキル教育の必要性を指摘する意見がいくつかみられた。大人同士が社会的交流を通じて社会的スキルを育てている姿を子どもは目にしていないのではないかと、すなわち子どもが社会的スキルを身につけるうえで大人がモデルとして適切に機能していないのではないかと懸念する声もある（小林, 2000）。市民には社会的スキルの学習プロセスにおけるモデリングの効果について説明し、たとえ学校での社会的スキル教育に直接的には関与しないとしても、自身のふるまいがモデルとして子どもに与える影響の大きさを自覚してもらう必要があるだろう。また、成人であっても社会的スキルが十分でないものが多いという社会状況にあるからこそ、発達早期からの社会的スキル教育が必要であることを伝えていく必要があるといえる。

2. 社会的スキル教育で取り上げてほしいと思うスキル

受講者27名から回答を得た。表1には各項目の選択人数、割合（選択人数/回答人数）、順位を示した。幼稚園では「①上手にあいさつをする」「③上手に相手の話を聞く」「⑤遊びなどの仲間に入れてもらう」といった基礎的なスキルが上位3位にあげられた。発達段階からして妥当な選択といえよう。これが小学校になると「⑤遊びなどの仲間に入れてもらう」に代わり、「⑥遊びなどの仲間にさそう」が上位にあがってくる。また、「⑩自分の意見や考えをはっきりと伝える」が第3位にあげられた。児童期には、幼児期に比べ、仲間関係の中でイニシアチブをとれるようなスキルの習得が求められているといえよう。この「⑩自分の意見や考えをはっきりと伝える」は、中学校では第2位、高校では第1位と発達段階が上がるにつれてニーズが高くなっていた。高校では「⑩自分にとっていやなことやできないことを上手に断る」も第3位にあげられていた。発達段階に伴って自己主張にかかわるスキルへのニーズが高くなる傾向にあった。その一方で、「⑧相手の気持ちを考えて接する」といったスキルも上位にあげられており、一方的な自己主張ではない、自己尊重の「アサーション」が求められていることがわかる。中学校、高校では「⑫誤解や意見のくいちがいなどのトラブルを上手に解決する」「⑬イライラしたり、ドキドキしたりした気持ちをコントロールする」といったスキルも上位にあげられていた。中学校以降では、かなり高度なスキルの習得が求められているといえよう。

中学校に関しては、中台他（2003）と金山・中台・前田（2003）によって中学生、中学校教諭、中学生の保護者に対する調査も実施されているので、市民に対する調査とあわせて考察する。中学生、教諭、保護者、市民のいずれもが高いニーズを示したスキルは「⑧相手の気持ちを考えて接する」（中学生第4位、教諭第2位、保護者第1位、市民第2位）や「⑫誤解や意見のくいちがいなどのトラブルを上手に解決する」（中学生第2位、教諭第1位、保護者第4位、市民第4位）であった。このよ

うなスキルは、中学校での社会的スキル教育において積極的に取り上げる意義があるだろう。一方、教諭（第4位）、保護者（第3位）、市民（第2位）が上位にあげた「⑩自分の意見や考えをはっきりと伝える」は、彼らの思いに反して中学生のニーズはあまり高くない（第7位）。このようなスキルを取り上げた場合、授業に対する中学生の動機づけはあまり高くないことが予想されるので、十分な対策を練っておく必要があるだろう。調査結果からすると、保護者や市民の理解と協力は得られやすいと考えられるので、学校だけでなく、家庭や地域社会においても、こうしたスキルを生徒が実行する機会を積極的に設け、生徒がスキルを実行したときには適切に反応する、賞賛するなどして、スキルの実行に対する生徒の動機づけを高めるとともに、授業で取り上げることの意義を認識させる努力を重ねる必要があるだろう。

表1 社会的スキル教育で一般市民が取り上げてほしいと思っているスキル

| 項目 | 幼稚園 | | | 小学校 | | |
|---------------------------------|-----|-----|----|-----|-----|----|
| | 人数 | 割合 | 順位 | 人数 | 割合 | 順位 |
| ① 上手にあいさつをする | 23 | 82% | 1 | 22 | 79% | 1 |
| ② 上手に自己紹介をする | 15 | 54% | 5 | 17 | 61% | 6 |
| ③ 上手に相手の話を聞く | 18 | 64% | 3 | 22 | 79% | 1 |
| ④ 上手に質問をする | 6 | 21% | 12 | 13 | 46% | 12 |
| ⑤ 遊びなどの仲間に入れてもらう | 23 | 82% | 1 | 19 | 68% | 5 |
| ⑥ 遊びなどの仲間にさそう | 16 | 57% | 4 | 20 | 71% | 3 |
| ⑦ はげまし、なぐさめなどのあたたかい言葉をかける | 8 | 29% | 10 | 15 | 54% | 11 |
| ⑧ 相手の気持ちを考えて接する | 9 | 32% | 9 | 16 | 57% | 8 |
| ⑨ 自分のしてほしいことなどを上手に頼む | 12 | 43% | 6 | 17 | 61% | 6 |
| ⑩ 自分にとっていやなことやできないことを上手に断る | 7 | 25% | 11 | 16 | 57% | 8 |
| ⑪ 自分の意見や考えをはっきりと伝える | 11 | 39% | 7 | 20 | 71% | 3 |
| ⑫ 誤解や意見のくいちがいなどのトラブルを上手に解決する | 5 | 18% | 13 | 11 | 39% | 13 |
| ⑬ イライラしたり、ドキドキしたりした気持ちをコントロールする | 10 | 36% | 8 | 16 | 57% | 8 |

表1(続き)

| 項目 | 中学校 | | | 高校 | | |
|---------------------------------|-----|-----|----|----|-----|----|
| | 人数 | 割合 | 順位 | 人数 | 割合 | 順位 |
| ① 上手にあいさつをする | 16 | 57% | 9 | 13 | 46% | 9 |
| ② 上手に自己紹介をする | 12 | 43% | 11 | 10 | 36% | 11 |
| ③ 上手に相手の話を聞く | 17 | 61% | 8 | 16 | 57% | 8 |
| ④ 上手に質問をする | 13 | 46% | 10 | 11 | 39% | 10 |
| ⑤ 遊びなどの仲間に入れてもらう | 10 | 36% | 13 | 8 | 29% | 13 |
| ⑥ 遊びなどの仲間にさそう | 12 | 43% | 11 | 10 | 36% | 11 |
| ⑦ はげまし、なぐさめなどのあたたかい言葉をかける | 21 | 75% | 5 | 19 | 68% | 7 |
| ⑧ 相手の気持ちを考えて接する | 23 | 82% | 2 | 23 | 82% | 3 |
| ⑨ 自分のしてほしいことなどを上手に頼む | 19 | 68% | 6 | 22 | 79% | 6 |
| ⑩ 自分にとっていやなことやできないことを上手に断る | 19 | 68% | 6 | 23 | 82% | 3 |
| ⑪ 自分の意見や考えをはっきりと伝える | 23 | 82% | 2 | 27 | 96% | 1 |
| ⑫ 誤解や意見のくいちがいなどのトラブルを上手に解決する | 22 | 79% | 4 | 26 | 93% | 2 |
| ⑬ イライラしたり、ドキドキしたりした気持ちをコントロールする | 26 | 93% | 1 | 23 | 82% | 3 |

最後に本研究の限界について述べる。本研究の調査対象者は年齢の広がりが大きかった。社会的スキル教育に対する認識や評価は年齢層によって異なる可能性がある。本研究では調査対象者の少なから、年齢層によって下位群を構成し、結果を比較するという作業は行えなかったが、今後、こうした分析も必要だろう。また、本調査は特定の地域における市民を対象に実施したものである。社会的スキル教育に対するニーズは、地域特性によって異なってくるものと考えられる。さらに、本研究では「自尊尊重のコミュニケーション理論」というテーマの講座に自主参加した市民を対象に調査を実施している。したがって、本調査の対象者は「コミュニケーションのあり方」に対する意識が高いと考えられる。結果の解釈にはこれらの点が考慮されるべきである。

引用文献

- 相川 充 2004 ソーシャルスキル教育が心を育てる 香川県教育センター平成 16 年度初任者研修会 <http://www.kec.kagawa-edu.jp/h16/kouza/H16kensyuukouza/35.htm> (2004.12.10)
- Cross, D. 1996 Skill building in school health education: A solid foundation or house of cards? *Japanese Journal of School Health*, **38**, 5-19.
- 藤枝静暁 2002 小学生を対象にしたソーシャルスキル・トレーニング 津村俊充(編) 教職研修総合特集 151 子どもの対人関係能力を育てる 教育開発研究所 Pp.206-209.
- 金山元春・後藤吉道・佐藤正二 2000 児童の孤独感低減に及ぼす学級単位の集団社会的スキル訓練の効果 行動療法研究, **26**, 83-96.
- 金山元春・日高 瞳・西本史子・渡辺朋子・佐藤正二・佐藤容子 2000 幼児に対する集団社会的スキル訓練の効果—自然場面におけるコーチングの適用と訓練の般化性— カウンセリング研究, **33**, 196-204.
- 金山元春・中台佐喜子・前田健一 2003 中学生の保護者を対象とした社会的スキル教育のニーズ調査 広島大学心理学研究, **3**, 109-115.
- 金山元春・佐藤正二・前田健一 2004 学級単位の集団社会的スキル訓練—現状と課題— カウンセリング研究, **37**, 270-279.
- 河村茂雄 1999 社会スキル不全 内山喜久雄・山口正二(編) 実践生徒指導・教育相談 ナカニシヤ出版 Pp.84-97.
- 小林正幸 2000 ソーシャルスキルをどうやって身につけるか 児童心理, **54** (3), 63-68.
- 小林正幸 2002 子どもの社会性を育てるソーシャル・スキル・トレーニング 1—なぜソーシャル・スキルなのか— 月刊学校教育相談, **16** (5), 52-57.
- 小林正幸 2003 子どもの社会性を育てるソーシャル・スキル・トレーニング 11—ソーシャル・スキル教育で目指すもの— 月刊学校教育相談, **17** (1), 50-55.
- 小林正幸・相川 充(編) 1999 ソーシャルスキル教育で子どもが変わる 小学校—楽しく身につく学級生活の基礎・基本— 図書文化
- 小泉令三 2002 学校・家庭・地域社会連携のための教育心理学的アプローチ—アンカーポイントと

しての学校の位置づけ— 教育心理学研究, **50**, 237-245.

前田健一・金山元春 2003 「子どもの社会性の育成と社会的スキル教育」について 広島市教育委員会主催平成 15 年度学校人権教育研究推進校合同研修会 (二葉中学校区) 研修会資料

森田 勇 2003 ソーシャルスキル・トレーニングの活用のポイント 河村茂雄(編) 教職研修スタートブック第 3 巻 人間関係づくりスタートブック 教育開発研究所 Pp.91-93.

中台佐喜子・金山元春・斉藤由里・新見直子 2003 小, 中学校教諭と中学生に対する社会的スキル教育のニーズ調査 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部(教育人間科学関連領域), **52**, 267-271.

NHK 2001 クローズアップ現代 No.1457 学校で人とつきあう技術を教える 2001 年 7 月 17 日テレビ放送

佐藤正二・金山元春 2001 基本的な社会的スキルの習得と問題行動の予防 精神療法, **27**, 246-253.

吉村 英 2003 社会的スキルと攻撃性 京都女子大学教育学・心理学論叢, **3**, 87-111.

渡辺弥生・山本弘一 2003 中学生における社会的スキルおよび自尊心に及ぼすソーシャルスキルトレーニングの効果—中学校および適応指導教室での実践— カウンセリング研究, **36**, 195-205.

謝 辞

本研究にご協力を賜りました皆様に感謝申し上げます。